

第1章 調査の経過

今年度の調査区は、整備計画に基き、昨年度調査区の南側に設定した。昨年度の調査結果から未発掘の阿弥陀堂南半分及び、他の建築遺構が確認できるものと予想された。

調査区は、昨年度検出した阿弥陀堂を全掘して規模の確認と釣殿池汀線の検出に主眼を置いて設定した。ここは昨年度調査区の南隣りに当たり、H・I-3・4・5区に跨る。

さらに次年度以後の調査のため北部地区（C・D-2・3区）に遺構埋設深度確認用の試掘坑を6ヶ所（a～f）設定した。

現地調査は昭和60年6月3日に開始して、約1230㎡を発掘して翌61年1月13日までに埋め戻しを完了した。その間の経過について以下日誌の抜粋を記す。

6月3日 下草を刈った後、
縄を張り調査区を設定する。

6月10日 重機が入り掘削を
開始する。

6月21日 作業員による面出
し作業に入る。

6月27日 阿弥陀堂付近で礎
石2個を検出する。

7月17日 精査に入り角柱列
を検出する。

7月20日 調査区東で池汀線
を検出する。その時に、池
中に落し込ました礎石と思
われる径1.5m程の河原石5
個を検出する。

7月29日 基準杭を調査区内
に打ち、合わせてレベル測
定を行う。

8月1日 調査区の南辺付近
で径1.3m程の中に根石が
遺存している礎石掘方8個
を検出する。

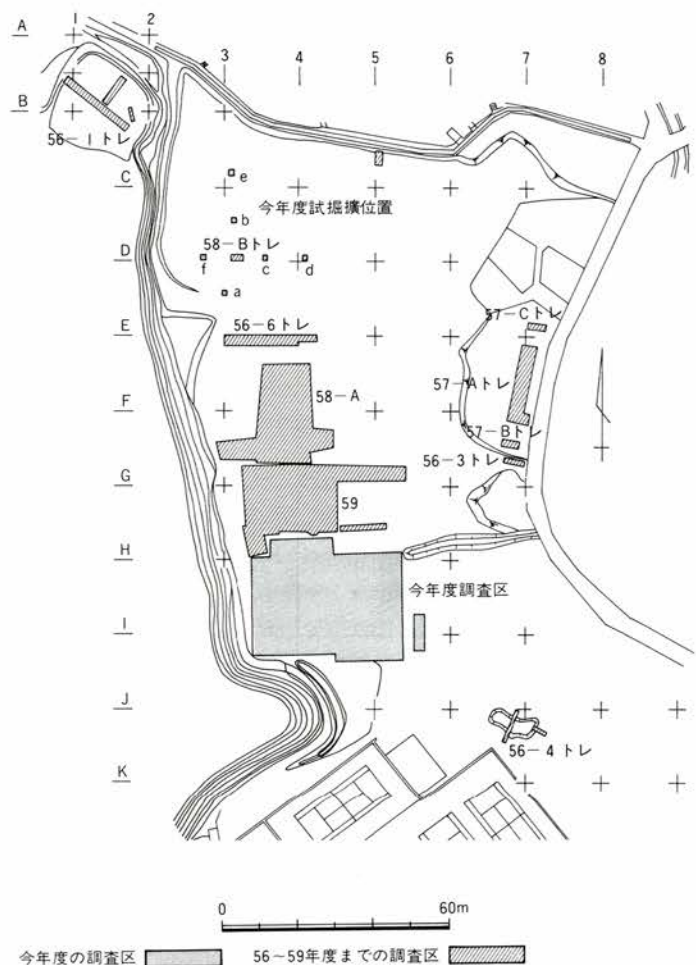


図1 調査区位置図

- 8月9日 阿弥陀堂周囲の角柱列の掘り下げを始める。
- 8月19日 調査区南辺付近で検出した礎石掘方を掘り上げた後、個別に現況を撮影する。
- 8月23日 北部地区に試掘坑を設定する。
- 8月30日 試掘坑 b、c で礎石と根石、e、f で雨落溝らしき遺構を検出。
- 9月7日 調査区全域で地形測量を行う。
- 9月14日 平面図、土層図の実測を開始。
- 10月14日 3ヶ所設定した拡張区の掘削を開始する。
- 10月21日 1間幅の南北5間、東西10間以上のL字状を呈する廊を検出。
- 10月28日 全景写真の撮影を終了。
- 11月20日 今日までに、山砂及び排土による埋め戻しを完了。
- 1月26日 釣殿部分にトレンチ設定。
- 2月13日 釣殿部分埋め戻し完了。

第2章 検出された遺構

1. 層序及び概要

現地表面より遺構検出面までは約30cm～50cmと比較的浅く、昨年度の調査区の表土よりも薄いものである。これは、今年度の調査区が谷の先端近くに位置するため、谷の奥から流れ込んでくる土砂の量が少ないためである。

後世の水田耕作及び畑作に伴う天地返し等の掘削が深部まで達している。

表土下の耕作土である灰色粘質土は、遺構面直上まで覆っており、ここまで掘削が及んでいたことがわかる。ただ遺構面直上に宝永年間の富士山の火山灰が見られることから、遺構そのものを削平するような掘削は、永福寺が焼失した応永12年から宝永年間に火山灰が堆積するまでの約300年間にわたったといえる。

遺構面は平均して標高19m前後であるが、阿弥陀堂周辺では19.3m～19.5mと高まり基壇の痕跡を僅かに留めている。

遺構検出面は、地山（黒褐色粘質土）上の暗褐色土と土丹による地業層である。地山が苑池に向い傾斜しているために、地業層は調査区の東の苑池に向かって厚みを増しながら造成され、平坦地を形成している。

調査区の西側では岩盤が露出している。この岩盤上に廊の礎石掘方を穿っているが、岩盤面は荒れており、穿たれた礎石掘方と数本の後世に掘削されたとと思われる溝を検出したただけである。岩盤直上まで灰色粘質土が覆っていた。

調査区の東側では遺構面が緩やかに池に向って傾斜して薄い砂礫がところどころに認められ池中

の厚い砂礫層へとつながっている。

2 阿弥陀堂

調査区北西部にて、昨年度の調査で北辺を検出した阿弥陀堂の全域を調査して、不明であった堂の規模を確認した。

基壇

昨年度検出した基壇状の高まりが今年度も調査区の北西部において確認された。この高まりの南側の削平面の観察から、黒色土と土丹混りの暗褐色土が交互に盛られた基壇の版築であることがわかった。残存している基壇の高まりは、最高で標高19.5mを測り遺構面より約50cm程高い。

礎石、礎石掘方

大型の礎石3個を基壇上面から検出したが、いずれの礎石も移動させられたり、割られたりして原位置を留めているものはない。しかし礎石掘方内にある2個は、原位置を推定することも可能であろう。残りの1個は基壇面上に転がされていた。

礎石はいずれも火災を受けて表面が剥離してしまい、柱座面は残っていない。また礎石の下部にあるはずの根石は、抜き取られたのか遺存していなかった。

礎石の他に礎石掘方は3ヶ所で検出できたが、2ヶ所には先に述べた礎石が遺存している。残りの1ヶ所では、概ね原位置を留めていると思われる根石が創建期の女瓦を伴って検出されている。

以上が確認された礎石及び掘方である。この他の礎石及び礎石掘方は削平を受けて残っていなかった。

角柱列

基壇周囲で昨年度に続き角柱が遺存した角柱列を検出した。基壇を四周する柱穴は東辺と南辺では地業面を掘り込み、堂の背にあたる西辺では岩盤を穿ち作られている。

柱穴の覆土は細かい土丹を含む褐色土である。角柱が遺存していない柱穴の覆土は、灰色粘質土で旧水田耕作土と同一である。このため角柱は後世に取られたものと思われる。

柱穴の掘方は、径60～80cmの円形で深さは遺構検出面より約40cmを計る。ただ岩盤上に穿たれた掘方は、径80～100cm程の円形で大きなものである。

角柱は(ニ)・(ヌ)・(ノ)・(ハ)・(ヒ)・(フ)・(ヘ)・(ホ)・(モ)の柱穴に遺存しているが柱根を保護するために今年度は柱あたりしか掘っていない。そのために、昨年度角柱で観察できた角柱周囲に貼り付けてあった木皮は認められることはできなかった。いずれの角柱も立ち腐れの状態から概ね原位置を留めていると思われる。

角柱は、長辺が21～24cm、短辺が18cm前後を計り、長辺が建物と平行になるように据られている。南東隅の角柱(フ)だけが24×25cmとほぼ正方形である。これは昨年度検出した角柱(カ)と同様で、東南方向からの柱見付を統一したものであろう。

表1 阿弥陀堂角柱列観察表

番号	柱穴の規模			柱根	角柱の規模			礎石	備考
	東西	南北	深さ		東西	南北	残高		
ト	76	58	40	—	—	—	—	○	瓦
ナ	64	61	40	—	—	—	—	○	
ニ	62	70	40	○	18	21	35	—	
ヌ	63	74	38	○	19	22	20	—	
ネ	68	58	36	—	—	—	—	—	瓦
ノ	61	67	38	○	20	23	18	—	
ハ	66	66	35	○	19	22	15	—	
ヒ	67	78	33	○	20	22	16	—	
フ	70	64	35	○	25	24	15	—	
ヘ	76	78	40	○	22	18	20	—	
ホ	71	78	40	○	22	19	10	—	
マ	59	68	39	—	—	—	—	—	
ミ	57	65	41	—	—	—	—	—	

番号	柱穴の規模			柱根	角柱の規模			礎石	備考
	東西	南北	深さ		東西	南北	残高		
ム	80	85	40	—	—	—	—	—	
メ	78	92	41	—	—	—	—	—	
モ	88	98	40	○	18	22	10	—	
ヤ	106	102	53	—	—	—	—	—	
ユ	100	105	55	—	—	—	—	○	瓦
ヨ	77	70	30	—	—	—	—	—	
ラ	66	95	35	—	—	—	—	—	
リ	100	110	42	—	—	—	—	○	
ル	63	70	40	—	—	—	—	○	瓦
レ	77	70	60	—	—	—	—	—	
ロ	80	78	50	—	—	—	—	○	
ワ	73	93	65	—	—	—	—	○	

○印は現存を示す。数字の単位はcm。

角柱列は桁方向で12間、梁方向で10間を数える。四隅の1間を除くと、桁方向10間、梁方向8間となる。

角柱の柱間寸法は角柱芯心で計り、四隅のそれぞれ1間が1260～1270mm、桁方向10間の内南から5間目が2180mm、6間目が2360mmで他の1～4、7～10間が1500～1540mmを計る。梁方向8間の内東から11・2間目と7・8間目が1510～1520mmで、中の3～6間目がそれぞれ1665mmを計る。

梁方向の柱間寸法は、昨年度検出した北辺の角柱列から割り出した寸法と異なる。

階段

阿弥陀堂の正面中央にあたる角柱ナ・ニ・ヌの東側2135mmの所に桁行に平行して南から柱穴a・b・c・dがある。いずれも東西約

80cm、南北約50cmと東西に細長い楕円の平面形を呈する。柱穴の中に1～3個の東西に長い根石が遺存する。柱穴cとdの中には根石に伴って創建期の女・男瓦が敷き込まれていた。

これらの柱穴に遺存する礎石は、堂に取り付く階段の筋桁を支えるため、据られたと思われる。

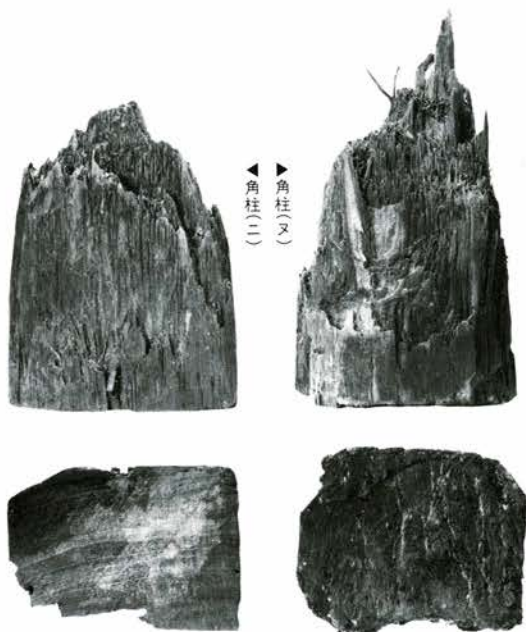


図2 角柱根

柱穴 a の南東約 1 m と柱穴 d の北東約 1 m の所に、東西 65～70 cm、南北約 100 cm の掘立になる柱穴を検出した。位置的に向拝柱になる可能性も考えられなくはないのであげておく。

堂の規模

昨年度の成果と今年度の調査で、阿弥陀堂の規模の復元が可能になったと思う。昨年の調査と合わせて基壇上に計 6 個の礎石と 3 ケ所の礎石掘方が確認された。しかし礎石は、原位置に留まっているものは一つもなく、掘方についても柱本体の芯心を求めることはできない。そのために建物の規模復元には、昨年度と同様な方法として、遺存する基壇角柱の芯心から柱間寸法を割り出した。

四囲の角柱列がすべて検出されたので、角柱列の柱間 2 間をもって堂本体の 1 間を構成していることは昨年推測した通りであった。

阿弥陀堂造営尺の復元を、角柱芯心から推定してみた。復元には遺存状態の良好な北辺と東辺の角柱列の数値を用いた。

北辺角柱列〔全長 15,250 mm・現尺 50.33 尺・推定造営尺 50 尺〕

東辺角柱列〔全長 19,230 mm・現尺 63.47 尺・推定造営尺 63 尺〕

北辺と東辺の推定造営尺の現尺との平均比は、各 1.007 尺で現尺より僅かの寸伸びがある。造営尺をこの数値より求めると、1 尺は 305 mm と推定される。

外周する角柱列の四隅の 1 間を除くと、桁方向 10 間、梁方向 8 間を数え、角柱列の柱間 2 間で堂本体の 1 間を構成している。従って阿弥陀堂の規模は、桁行 5 間、梁行 4 間の堂となる。

表 2 阿弥陀堂及び廊礎石掘方観察表

番号	掘方の規模			礎石	根石	備 考	番号	掘方の規模			礎石	根石	備 考
	東西	南北	深さ					東西	南北	深さ			
1	160	—	30	—	○	創建期の女瓦含む	16	115	115	20		○	
2	170	180	25	○	—	礎石横転	17	120	110	20		—	
3	150	150	36	○	—	礎石半分に割れる	18	110	110	21		○	
4	95	100	5	—	—		19	110	125	29		○	
5	70	70	16	—	—		20	120	123	22		○	
6	65	78	8	—	—		21	105	130	28		○	
7	100	85	7	—	—		22	110	130	26		○	
8	80	80	23	—	○	岩盤上	23	95	95	22		○	
9	70	70	23	—	—	岩盤上	24	125	125	10		○	
10	115	140	20	—	—	岩盤上	25	145	150	23	○	○	礎石は動いている
11	110	125	19	—	—	岩盤上	26	130	150	12	○	○	礎石は動いている
12	105	100	11	—	—	岩盤上	27	—	—	—	—	○	削平のため規模不明
13	70	75	30	—	○	岩盤上	28	170	180	108	—	—	掘立柱掘方
14	70	75	21	—	—	岩盤上	29	110	105	20	—	○	下に門柱柱根有
15	130	130	26	—	—								

○印は現存を示す。数字の単位は cm。

角柱芯心距離から堂の柱間を割り出すと、桁行5間の内中央1間が4540mm（14.9尺）残りの4間が3020～3050mm（9.9～10尺）となり桁行の寸法は16,700mm（54.75尺）となる。梁行4間の中央寄りの2間が各3330mm（10.9尺）両側の各1間が3020～3030mm（9.9尺）を計り、梁行は12,710mm（41.7尺）となる。

3 廊

阿弥陀堂の南で検出した建物で、阿弥陀堂南側面の西から2間目に取り付く形になる。

廊の礎石の大半は失われていたが、礎石掘方の痕跡や掘方に遺存している根石等から、1間幅で南北に5間、東西に10間以上のL字形をした細長い建物であることが確認できた。

廊の幅は南北列で3330mm（10.9尺）東西列で3660mm（12尺）を計る。

廊の柱間は、阿弥陀堂より南に延びる5間のうち北側4間が2440mm（8尺）5間目が、東西列の幅と同じ3660mm（12尺）を計る。

L字形に東に曲った東西列は西から1間目が南北列と同じ3330mm（10.9尺）で後は、2～7と9、10間目が南北列の柱間と同じ2440mm（8尺）である。

西から数えて8間目は4880mm（16尺）と他の2倍の柱間寸法を持つ。

東西列の南側にはほぼ平行して後世に溝が掘られている。この溝のために、廊の南半分が西から7間目まで削平されてしまっている。

廊跡で用いた柱間寸法は、中門跡と推定した礎石掘方28に遺存している掘立柱の柱根の芯心を中心に、右左に展開して各礎石掘方の中央に線を引き、機械的に割ったものであることを断っておく。

椽束

廊跡の礎石掘方6、16～20の脇に径40cm前後の浅い柱穴が検出された。この他の礎石掘方の脇からは削平されたのか検出されなかったが、椽束の可能性もあるのであけておく。

中門

廊跡東西列の西から8間目が幅広く、他の柱間の2倍であることは先に述べたが、これに該当する礎石掘方は、20、21、26、27である。さらにここでは、1間幅の廊の中間に礎石掘方28、29を設けて2間割りにしている。

礎石掘方29の下層に直径約50cm、長さ約65cmの柱根が遺存している。このことから礎石掘方29と後世に攪乱されてしまっているが恐らく28も、当初掘立柱であったと思われる。出土状況から判断すると、掘立柱で建立されたものの、根腐れのため柱の下部を切り取り、礎石に入れ換えた基礎の修理の痕跡と見ることができよう。

2間割りにした中間の柱を掘立柱として、深く地中に埋め周囲を突き固めている。

掘方28と29が対になることから、掘方29に遺存する柱根を棟門の門柱と見ることができる。とするならば、この門は南門より永福寺伽藍内に通じていた中門であると思われる。

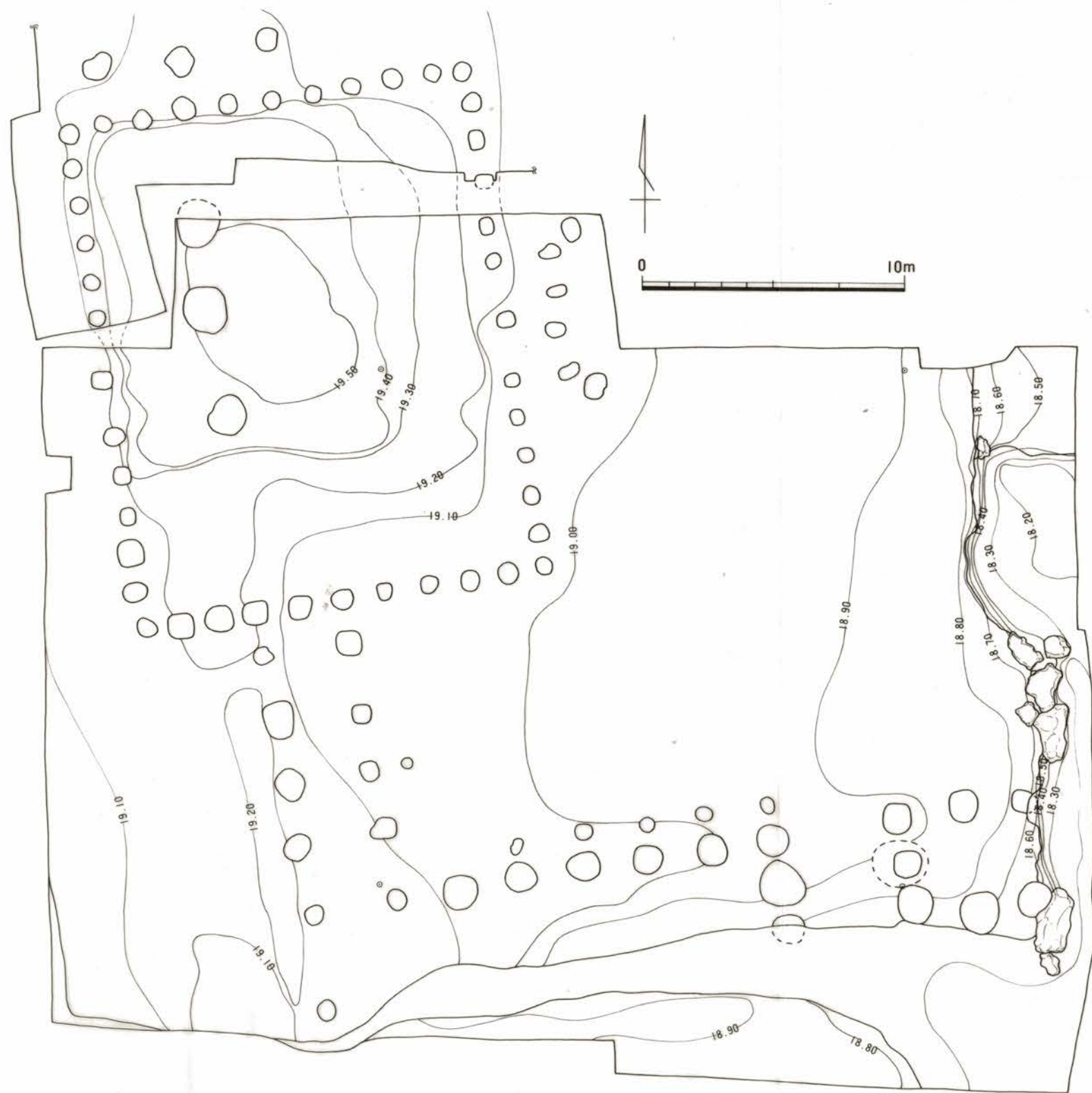


图3 遺構面地形測量図

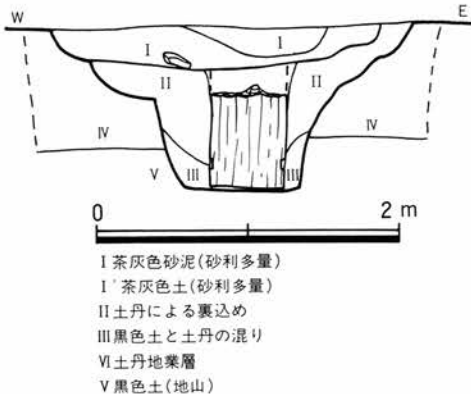
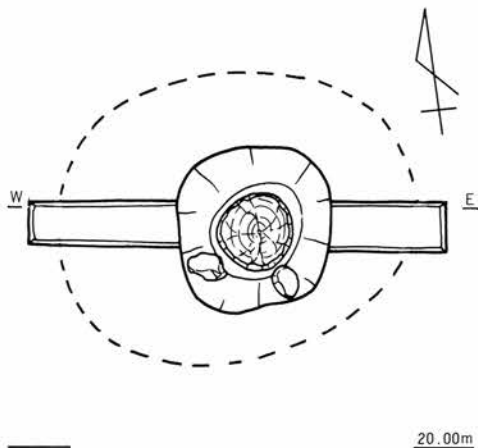


図5 中門柱根検出状況

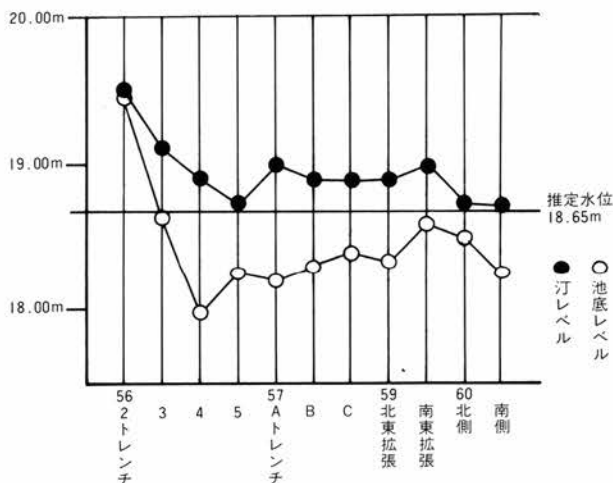


図6 苑池水位対比模式図

4. 池汀線

調査区の東辺にほぼ平行するように、池汀線を南北方向に約23m検出した。

調査区の北東隅より南へ5mまでは、昨年度検出した池汀線の状態と類似している。遺構面上とところどころに薄く堆積している砂礫が、池汀線付近より少しずつ厚くなり、池中では約30cmの堆積となって洲浜状の様相を呈する。

これより南では池汀線の様相が一変する。池底が急に約30cm程深くなり、厚く堆積していた砂礫がほとんど見られなくなる。そして岸辺に、池の護岸をも兼ね備えたと思われる2m前後もある巨大な鎌倉石(凝灰岩)を配している。

この鎌倉石の配石のために、池汀線は変化に富んだ姿を見せている。

池汀線の標高は19.7m前後である。池底の標高は調査区の北側で18.5m、南側で18.25mを測る。

今年度までの調査で確認されている池汀線と池底のレベルを対比すると、図6のようになり、苑池の水面想定レベルは18.65m前後になる。56年

度2トレンチは、山際のために標高が高く、池汀線まで達していないものと考えられる。

5 釣殿

今年度検出した廊の東端を、池中に延長した所に南北一列に4個の礎石が露呈している。

この礎石が存在することにより、古くからこの地が釣殿の推定地とされてきた。しかし配列は、規則正し

く据えられているわけではなく、原位置を留めているとは考えにくい。

今年度検出した廊の北辺の延長線上にあるのが礎石1である。周囲に掘方も検出した。礎石2・3は池底に置かれた状態で据えられてはいない。礎石4は池底を少し掘り込んで据えられているかのように見える。礎石1～4の間は20尺(6100mm)を計る。礎石2・3の中間で検出した径40cm程の浅い凹は、廊の南辺の延長線上にあり礎石掘方の可能性がある。礎石1からはこの凹までの長さは廊の幅と同じく12尺(3660mm)、凹から礎石4までは8尺(2440mm)を計る。このことから池中に中央12尺、両脇8尺程度の3間四方の建物が建っていたと想定できるかもしれない。

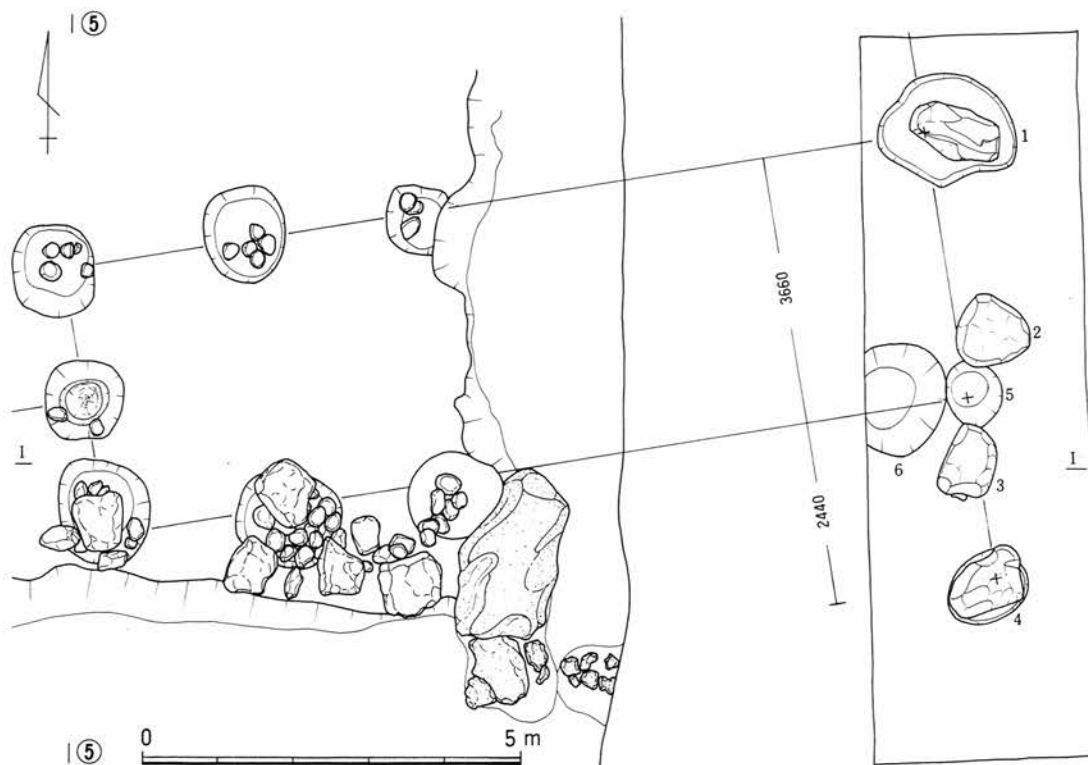


図7 池中礎石列平面図

6 北部地区の試掘

次年度以後の発掘調査のため、北部地区(C・D-2・3区)に遺構埋没深度確認用の試掘壕(a～f)6ヶ所を設定した。

層序

基本的に、a～f地点とも同じ様相を呈している。表土の下に水田耕作土である灰色粘質土が厚く堆積している。この下部に宝永年間の富士山の火山灰が見られる。ここまでは、今年度の主調査

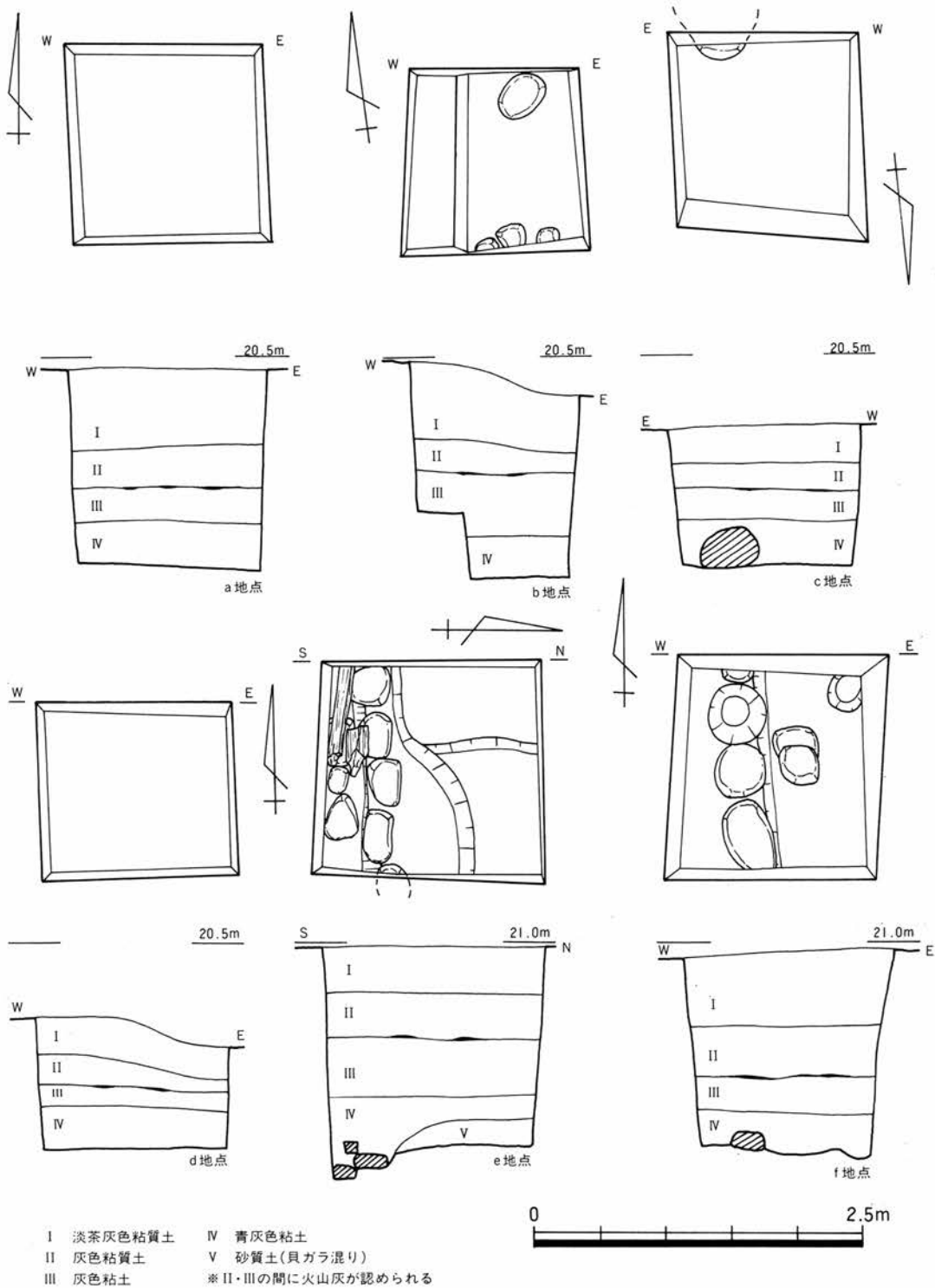


図8 北部地区試掘地点平面及び土層図

区の層序と同じであるが、主調査区では、火山灰が遺構面直上に堆積していたのに対して、北部地区では火山灰の下に灰色粘土、青灰色粘土層が60～70cm程の厚さで遺構面を覆っている。このことは北部地区は比較的早い段階に埋没した後、後世にあまり荒らされていないものと推測できよう。遺構面は、地山（黒褐色粘質土）を削り出しており、主調査区で見られた土丹による地業は行われていない。

a 地点

地表から遺構面まで約 150 cm を計る。遺構面の標高は18.9mである。遺構は検出されなかった。

b 地点

地表から遺構面まで約 165 cm を計る。遺構面の標高は18.8mである。遺構面上で径40cm程の礎石と径25cm程の根石になると思われる集石を検出した。いずれも安山岩質の河原石である。

c 地点

地表から遺構面まで約 110 cm を計る。遺構面の標高は18.9mである。安山岩質の径50cm以上の礎石を検出した。

d 地点

地表から遺構面まで約 80～100 cm を計る。遺構面の標高は18.9mである。礎石などは検出されなかったが、瓦類が多量に出土した。

e 地点

地表から遺構面まで 160 cm を計る。遺構面の標高は19.3mを計る。山際近くのためか、遺構面の標高が高くなる。東西方向に径40cm前後の河原石を使った2列の石列を検出した。この石列は、南側の列が一段低く据えられており東西方向に細長い溝になるものと思われる。

f 地点

地表から遺構面まで約 160 cm を計る。遺構面の標高は19.3mである。南北方向に径40cm前後の河原石を使った石列が検出された。この石列は、e 地点で検出された石列と同様の段差を持つ石列で、これも細長い溝になるものと思われる。

試掘壕を設定した位置は、薬師堂があったと推定される場所である。b・c 地点で検出した礎石及び根石とらしい河原石は、堂を構成していた礎石等と見ることもでき、さらに e・f 地点で検出した溝状の石列は、堂及び付属する建物の雨落ち溝と見ることもできよう。狭い範囲での検出なので委細は不明である。

第3章 出土した遺物

今年度の発掘調査で出土した遺物の大部分は瓦類であるが、その他に舶載磁器、国産陶器、土器、石製品、木製品、古代の遺物が少量得られた。遺物の出土状況は、廊跡東端周辺及び北部地区試掘 d 地点からまとまった資料が出土したが、遺構に伴って検出された遺物は少量であった。大半は遺

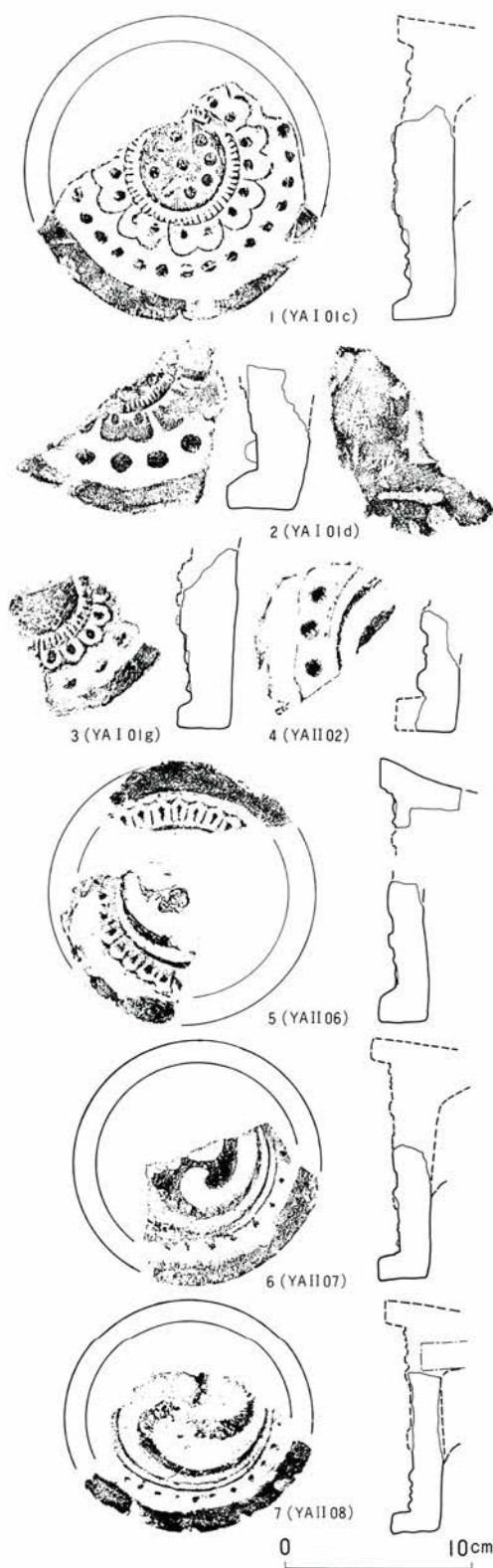


図9 鍍瓦(1)

構検出面上及び包含層に散乱または廃棄されたような状態で新旧の遺物が混在して出土した。

1 瓦 類

今年度の調査により出土した瓦類は、調査区全域から破片数にして約2600点以上が出土した。これらは、ほとんどが遺構面上および包含層から出土したものであるが、廊跡東端周辺や北部地区試掘地点dでは、まとまった資料が出土している。こうした地点別の出土傾向に種類別の出土比率を合せてみると、廊跡東端周辺には、YA II 06、Y N II 06、そして女瓦E類が集中的に出土しており、北部地区試掘地点dでは、女瓦A類がここから出土した女瓦全体の62.4%を占めるという特徴的な傾向が認められた。

全体でも、女瓦E類が増加し、女瓦A類が減少するといったように今年度は、昨年度および一昨年度とは完全に異なった傾向にある。(表3参照)

鍍瓦 (図9、10)

今年度は7型式が確認された。

YA I 01は3範種が確認されたが、このうちc・dはこれまでの調査でも出土しており、gのみが今回初めて出土した範種である。dは瓦当部裏面にスタンプが押捺されていたものと思われる。gは蓮弁の表現がcに近いが、蓮弁中央のくびれが雄シベの部分にまで接していることに特徴がある。規格のうえでも、YA I 01は瓦当面の直径が16cm前後の一群であるなかであって、gは復元される直径が14cmと小さくなっている。これらYA I 01はいずれも胎土が若干の砂を含むものの比較的良質で、焼成が軟質の灰白色ないし灰褐色を呈する製品である。

YA II 02は範種aのものであり、珠文が1、2

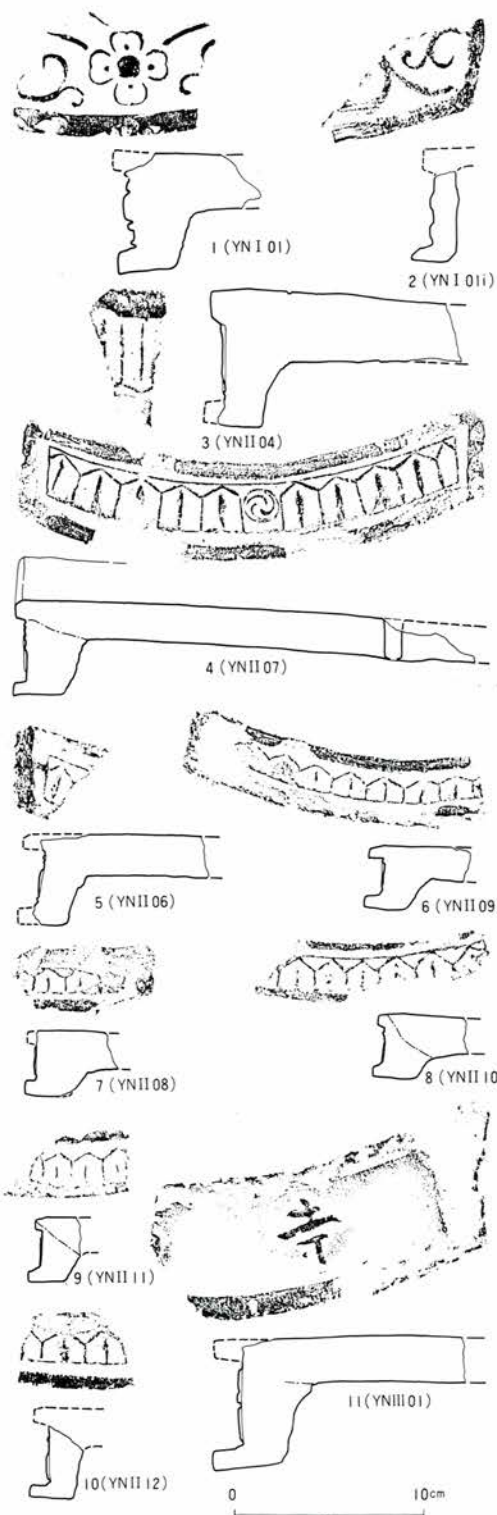


図11 宇瓦

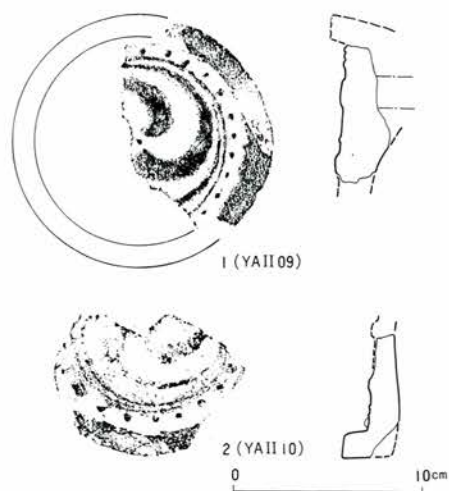


図10 鐙瓦(2)

cmと大きく、良質の胎土で灰白色を呈する。

Y A II 06は左廻りの三巴文の外側に陰刻の剣頭文がめぐっているもので、本年度初めて出土した型式である。三巴文と剣頭文の組合わせによって瓦当文様を構成することからみて、Y N II 06の軒先でのセット関係が想定される。

Y A II 07もまた今年度初めて出土した型式で、左廻りの三巴文が陰刻で表現されるものである。胎土は粗く焼成は硬質で、灰褐色を呈する。

Y A II 08、09、10の3型式は文様的に類似した関係にあるが、09は瓦当面中央で三つの巴の頭に囲まれるように1個の珠文が置かれていることを特徴とする。08と09では外区内縁の珠文間隔に差がみられる。これらは、いずれも胎土は粗く、焼成は軟質と硬質のものがあるが、灰黒色を呈する。以上Y A II 類はY A II 02を除き、いずれも瓦当面に離れ砂の痕跡が顕著に認められる。

宇瓦 (図11)

今年度は10型式が確認された。

Y N I 01は昨年度までの調査では、宇瓦の大半を占めていた型式であるが、今年度は宇瓦全体の僅か13.5%に過ぎなかった。

Y N II 04は下向きの剣頭文で、3.9 cmの大きな剣頭文である。良質の胎土で焼成は軟質、灰黒色を呈する。

Y N II 06は左廻りの三巴文を中心飾りとし、左右に5個の上向き剣頭文を配す。瓦当面の四囲には界線がみられる。凸面は一部に×状の叩き目痕があるが、多くは縦位のナデによって荒く調整されており、細かい離れ砂が多量に使用されている。凹面には、へら状工具による横位のナデが認められる。胎土は粗く、焼成は硬質である。黒灰色を呈す。

Y N II 07、08、09、10、11、はすべて上向き剣頭文の下にのみ界線を有している。頸部から女瓦部にかけて横位のナデ調整が施されている。瓦当面と女瓦部凹面には離れ砂であろう黒色微粒が一部付着している。胎土は小石を含む粗土で、焼成はやや軟質である。灰白色を呈す。

Y N III 01は、「永福寺」銘宇瓦の「寺」の部分にあたるものである。粗土を胎土とし、焼成は硬質で灰褐色を呈す。

以上、鐙瓦、宇瓦について簡単に述べてきた。冒頭でも述べたように軒先でセット関係を構成すると思われるY A、Y N双方のII 06が今年度、廊跡東端周辺を中心に軒先瓦全体の24.6%という比率で出土している。これらは北部地区の各試掘地点からの出土は皆無である。昨年度までの成果からみて、これらが、永福寺創建期の瓦ではないと思われるため、ある時期の修復、それも廊跡東端周辺の建物の修復に際して使用されたものと推測される。

男瓦 (図12)

破片数にして510点出土した。

男瓦はすべて玉縁付きのもので、凸面はナデや削りによって丁寧に調整が施され、縄目の叩きを消去している。

昨年度までと同様、男瓦には型式分類の要素が少なく、女瓦に対応し得るほどの細分ができない。したがって、今年度も胎土の良し悪しによって、A・B 2種に分類した。しかし、筒部の径および厚さといった規格のうえで、A・B 2種には異なった大きさのものがみられることにより、さらに細分が可能であると思われる。

A種は、破片数にして233点出土した。胎土は若干の砂を含むが良質である。硬質と軟質の製品があり、灰白色ないし灰褐色を呈する。

1は径15cm、厚さ2、3cmを測る。2、3はどちらも凸面のナデがやや荒く、縄目の痕跡を残す。いずれも厚さが1.8cmと薄手であるが復元される径は16～17cm程度である。

B種は破片数にして277点出土した。胎土は粗く、小石を多く含む。4は径13cm、厚さ1.8cmを測る製品で玉縁部長4.3cm、玉縁部径8.5cm、厚さ1.2cmを測る。

10は東海地方窯系の男瓦で、1点出土している。

女瓦 (図13、14)

昨年度の概要報告においては、女瓦A～D類について比較的多くの資料を図示して、各型式の特徴を既に指摘した。今年度の調査では、昨年度までほとんど出土しなかった女瓦E類の良好な資料

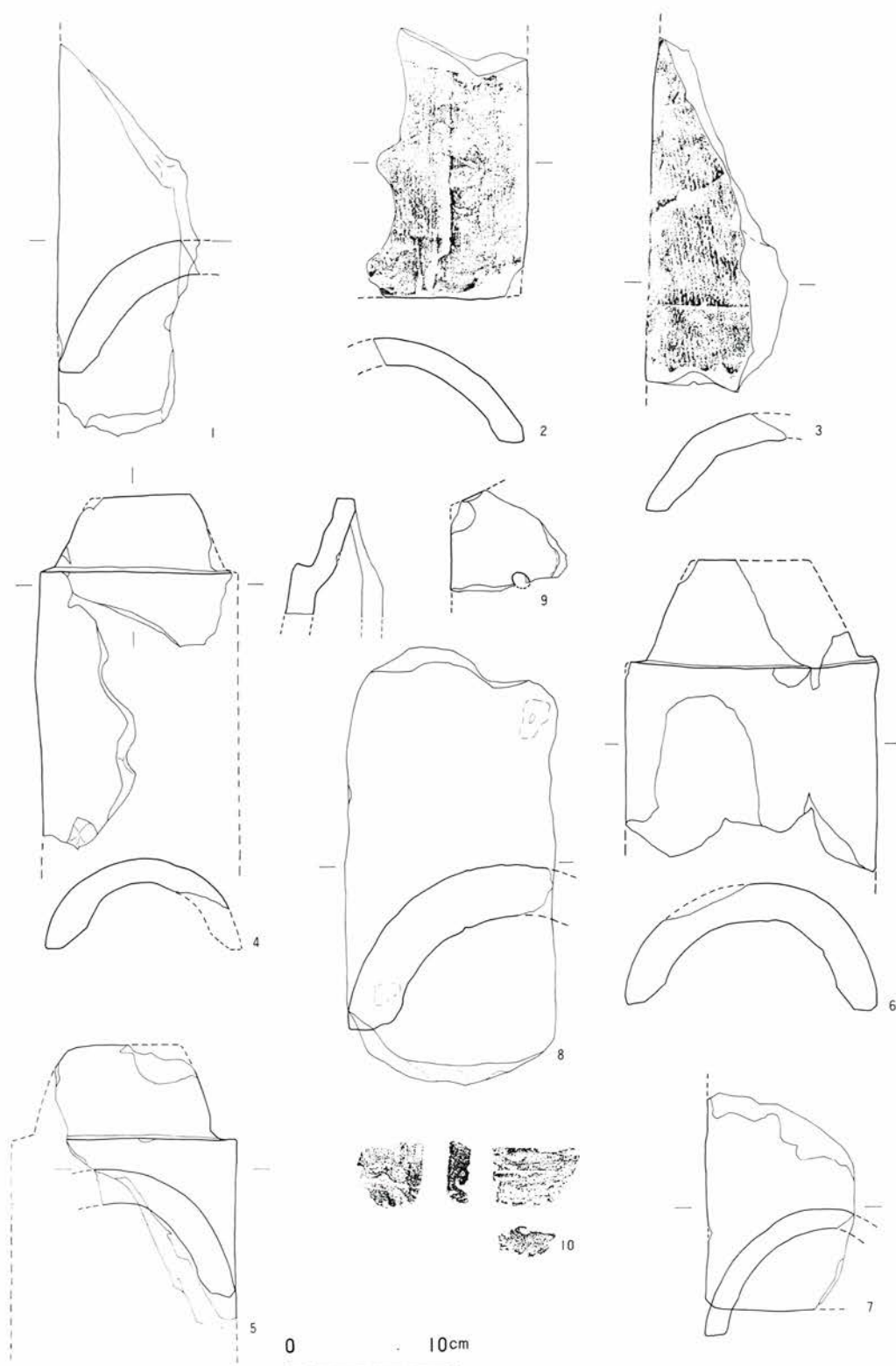


图12 男瓦

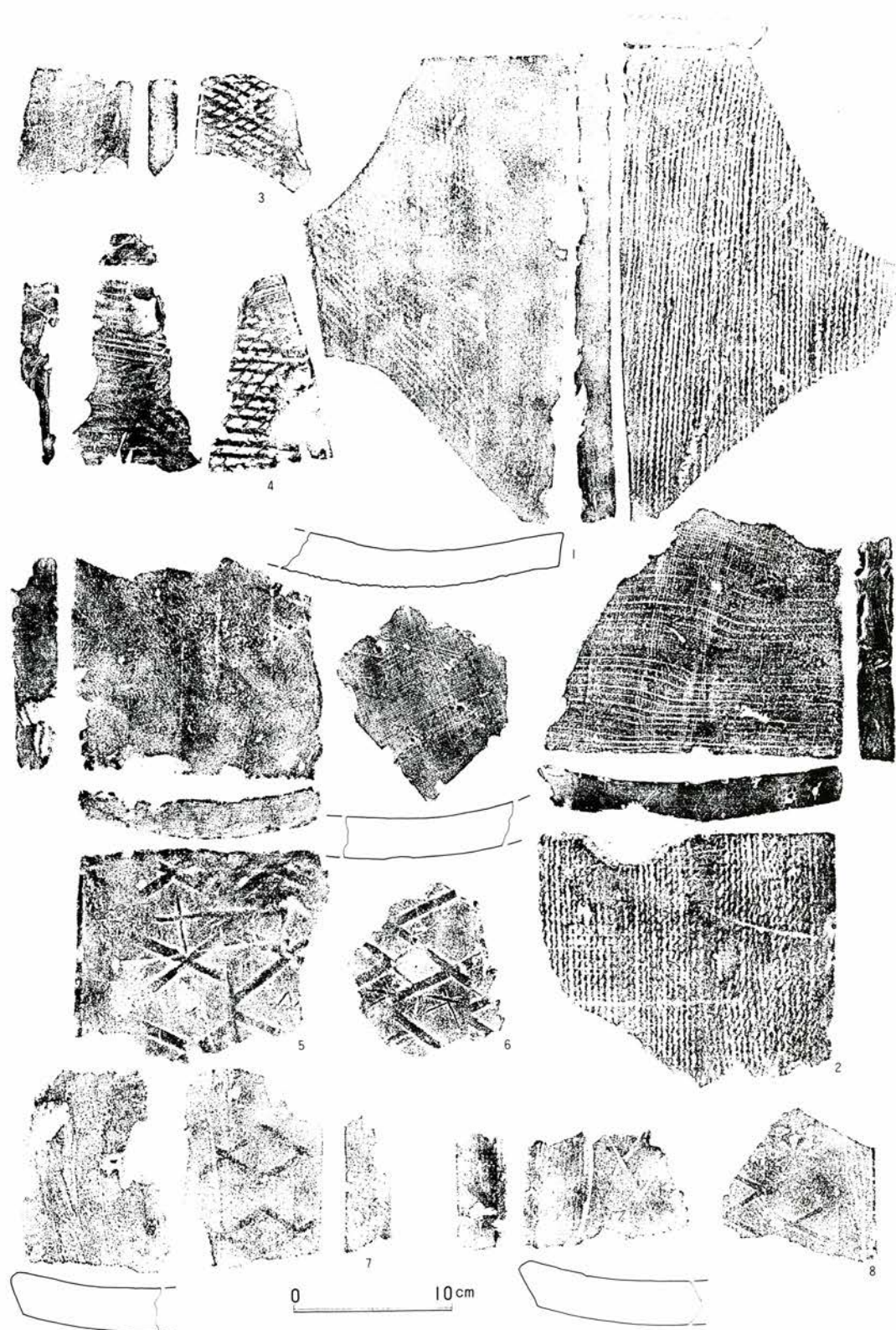


图13 女瓦A類・B類・C類・D類

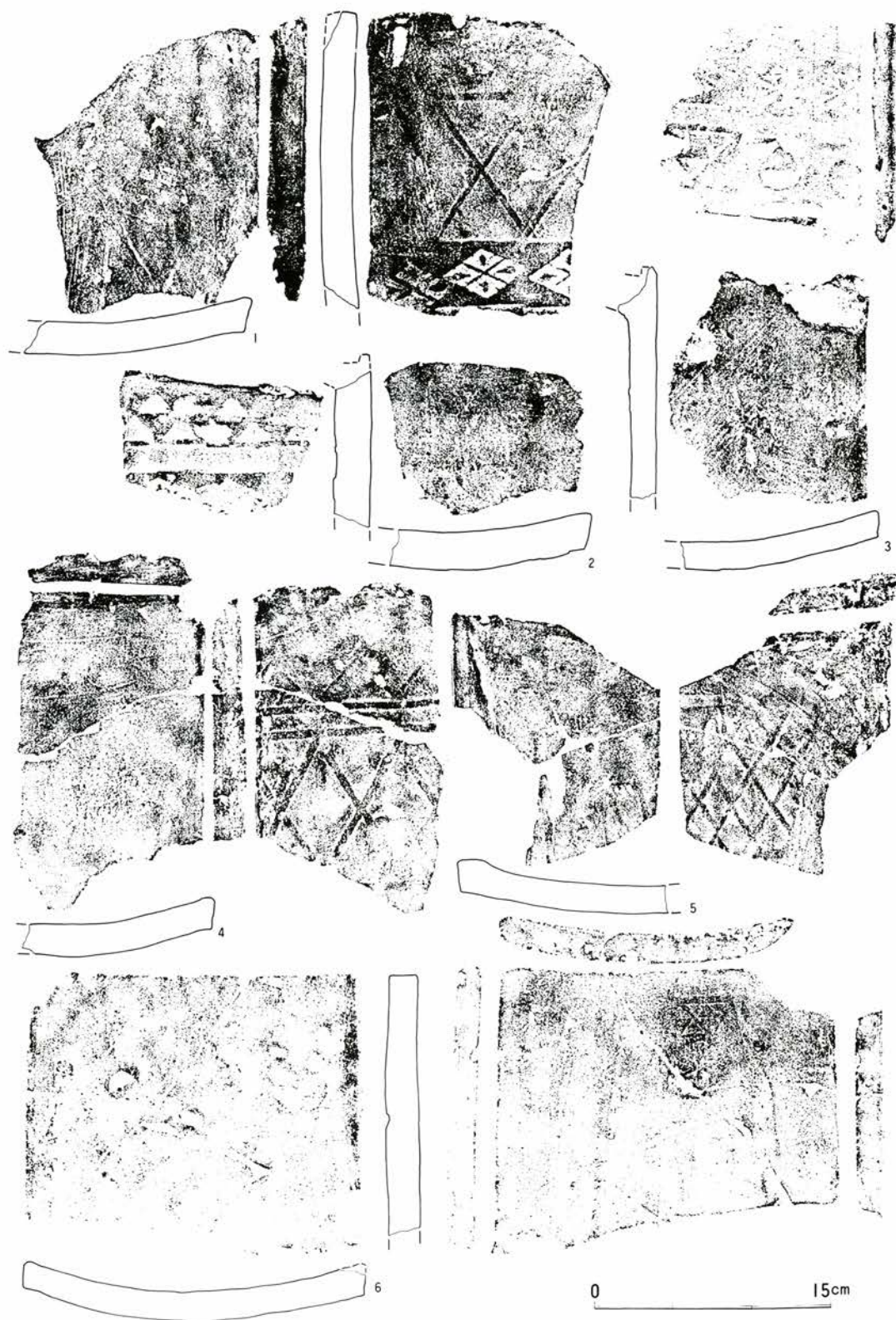


图14 女瓦E類
— 16 —

が、大量に得られた。したがって、今年度は女瓦E類について比較的詳しく報告することにする。

また、東海地方の窯で焼成されたと思われる女瓦をF類として新たに型式設定を行った。

今回出土した女瓦は、破片数にして2000点余りを数え、凸面の叩き目文様によってA～Fの6種類に分類することができた。その型式別出土数の内訳は表3に示したとおりであり、また昨年度と今年度の女瓦における型式別百分率比は表4に示すとおりである。

女瓦E類(図14)：凸面に×状の斜格子文(大・小)や横線などと組合わせて三鱗文・花菱文などの特徴的な叩き目を残し、端面や凹面に瓦工房印と思われる記号を押捺したものを含む一群である。胎土は砂や小石を多く含む粗いものが多いが、なかには精良な例もみられる。焼成は比較的良好で、灰褐色ないし灰黒色を呈する。6の例でみると狭端部幅21cmを測る。厚さ1.5～2cmの製品がほとんどを占める。

凸面は花菱文と大きな×印の組合わせによる叩き板によって文様のつけられた1の例、花菱文と三鱗文の叩き板による2・3の例、横線2本と×印および△印を組合わせた叩き目による4の例などがある。5は組合わせによる文様ではなく、小さな斜格子のみによるものであるが胎土、焼成などに女瓦E類と共通する要素をもつのでここに含めた。凹面にはへら状工具によるナデがみられる。凹凸両面ともに離れ砂と思われる黒色砂粒の付着が顕著である。凹面の側縁はナデによって、カーブ状に調整されて丸味を帯びている。また、5の例では凹面の側縁が一段高くなっている。これは一枚造りによる成形時に側縁となる部分の粘土がはみ出したことによるものと思われる。

女瓦の地点別出土状況は表3にみられるとおりであるが、縄目の叩きによるA類は全体の36.7%を占め、とりわけ北部地区試掘地点dで116点と集中的に出土した。細かい斜格子の叩き目によるB類は僅か10点のみの出土しかなく、過去の調査と同様の傾向にある。やや大きめの斜格子中に文字や記号を有するC類は表4にみるように全体に占める比率は特に変化していない。D類はそのうちの38.7%に当たる91点が北部地区試掘地点dに集中して出土した。E類はこのうちの約30%が廊跡東端周辺に偏在している一方、北部地区試掘地点では僅か2点しか出土していないことが注目されよう。

文字押印の女瓦(図15)

1～3はいずれも女瓦A類の凹面に人名スタンプを押捺したものである。1は「守光」、2・3は「文長」と判読できるが、同一のスタンプに拠るものではない。なお、昨年度の調査ではY A II 02 aの巴文鐙瓦のうち、瓦当部裏面に「守国」銘をへら書きしたものが出土している。いずれも遺構面上および包含層より出土したものである。

4は「文暦二年永福寺」銘を、5・6は「永福寺」銘をそれぞれ女瓦D類の凹面に押捺したものである。5は「寺」、6は「永」の一部が残るだけである。

工房印を押捺したと思われるものが5点出土している。7は二次的な被熱によって種類こそ不明であるが女瓦の端面に竹管で「○」印が押捺されている。8は女瓦E類の端面に棒によって「△」印が押捺されている。9、11はいずれも女瓦E類の凹面に押捺されたものであり、このうち11は三

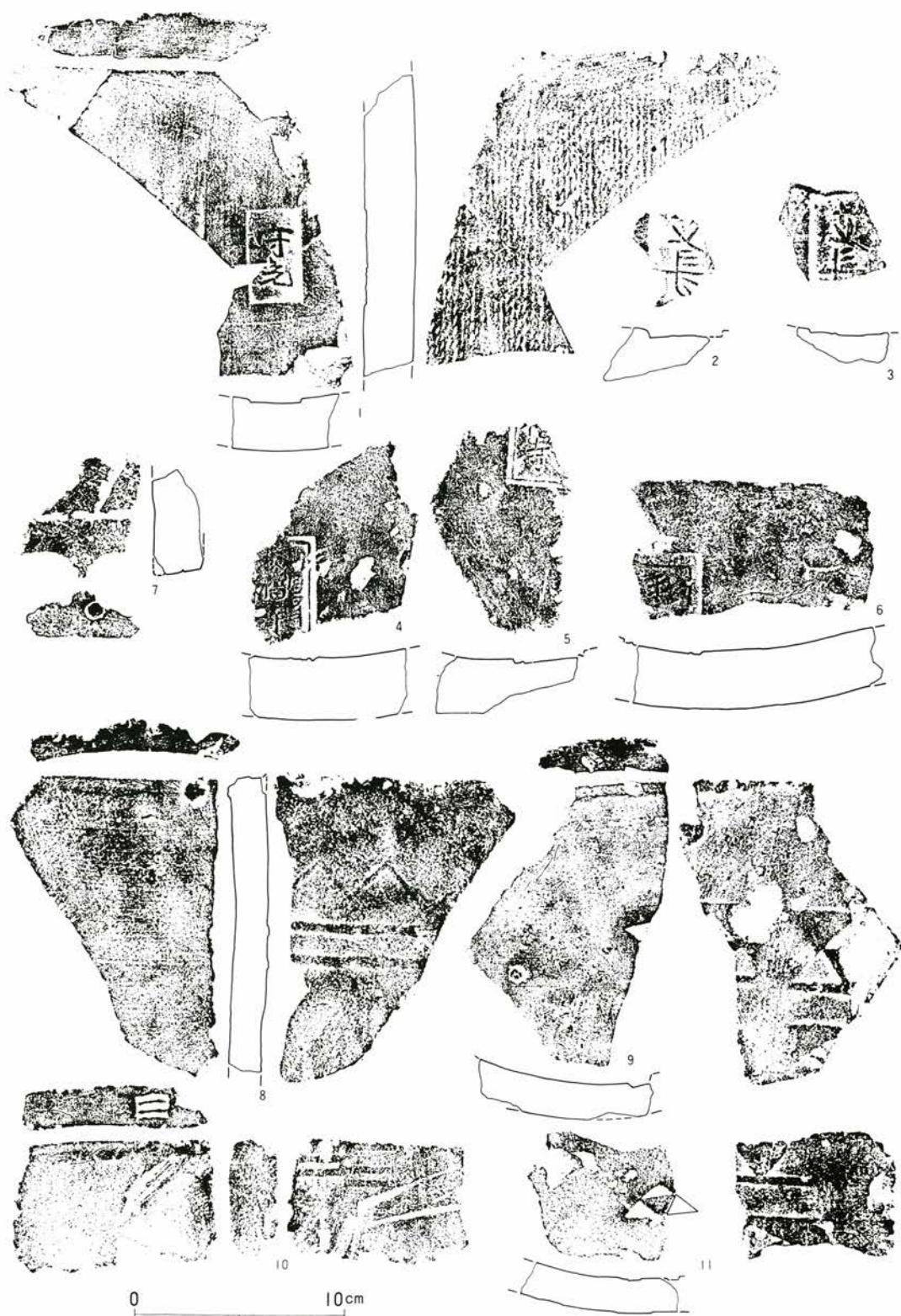


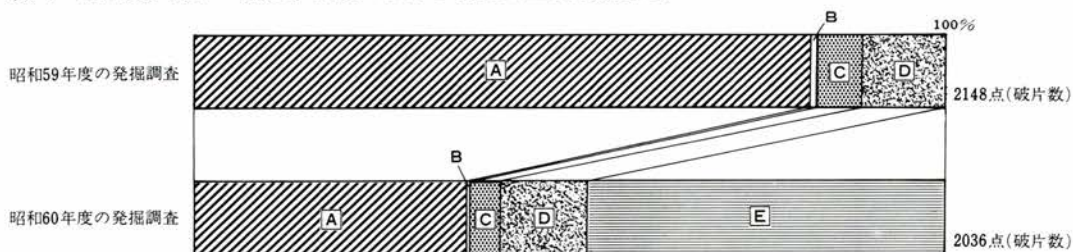
図15 文字押印の女瓦
- 18 -

表3 瓦類出土一覧表

種 類	出土地点	遺 構 別						端廊跡 周辺東	包面上 層及	北部地区試掘地点						計	比率 (%)	備 考
		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ			a	b	c	d	e	f			
瓦	Y A I 01								4							5	15.6	c・g各1、d2、不明1 a1
	II 02								1							1	3.0	
	II 06							4	5							9	27.2	
	II 07								1							1	3.0	
	II 08								1							1	3.0	
	II 09								1							1	3.0	
	II 10							1								1	3.0	
	型式不明							6	8							14	42.2	
	小 計							11	21							33	100	
瓦	Y N I 01								3							5	13.5	b・1各1、不明3
	II 04								1							1	2.7	
	II 06							3	5							8	21.6	
	II 07							1	2							3	8.1	
	II 08							1								1	2.7	
	II 09								1							1	2.7	
	II 10								1							1	2.7	
	II 11								1							1	2.7	
	II 12								1							1	2.7	
	III 01								1							4	10.8	
	型式不明							7	4							11	29.8	
	小 計							12	20							37	100	
女 瓦	A	11				1	10	29	476	2	1	2	166	43	5	746	36.7	人名押印「守光」1「文長」2 寺銘2、記年名1 記号「△」2、「○」「△」「目」各1 東海地方窯系
	B							1	5				3		1	10	0.5	
	C							11	67	1	1		5			85	4.1	
	D							14	92	7			91	29	2	235	11.5	
	E							281	677				1		1	960	47.1	
	F							1								1	0.1	
	小 計	11				1	10	337	1317	10	2	2	266	72	9	2037	100	
男 瓦	A		1	1	4		6	12	183	2		1	12	8	3	233	45.7	東海地方窯系の男瓦 小片が1点ある。数値に 含まれていない。
	B							53	204	2			11	5	2	277	54.3	
	小 計		1	1	4		6	65	387	4		1	23	13	5	510	100	
合 計		11	1	1	4	1	16			14	2	3	295	85	14	2616		

註) イ、礎石掘方No.1(阿弥陀堂跡) ロ、角柱列「ト」 ハ、角柱列「ユ」 ニ、角柱列「ネ」 ホ、階段掘方「C」 ヘ、階段掘方「b」

表4 昭和59年度・昭和60年度における女瓦の型式別百分比



註) 昨年度の出土瓦一覧表は女瓦E類3点・F類(東海地方窯系)1点を除いた数値であり、今年度では女瓦F類1点を除く数値である。

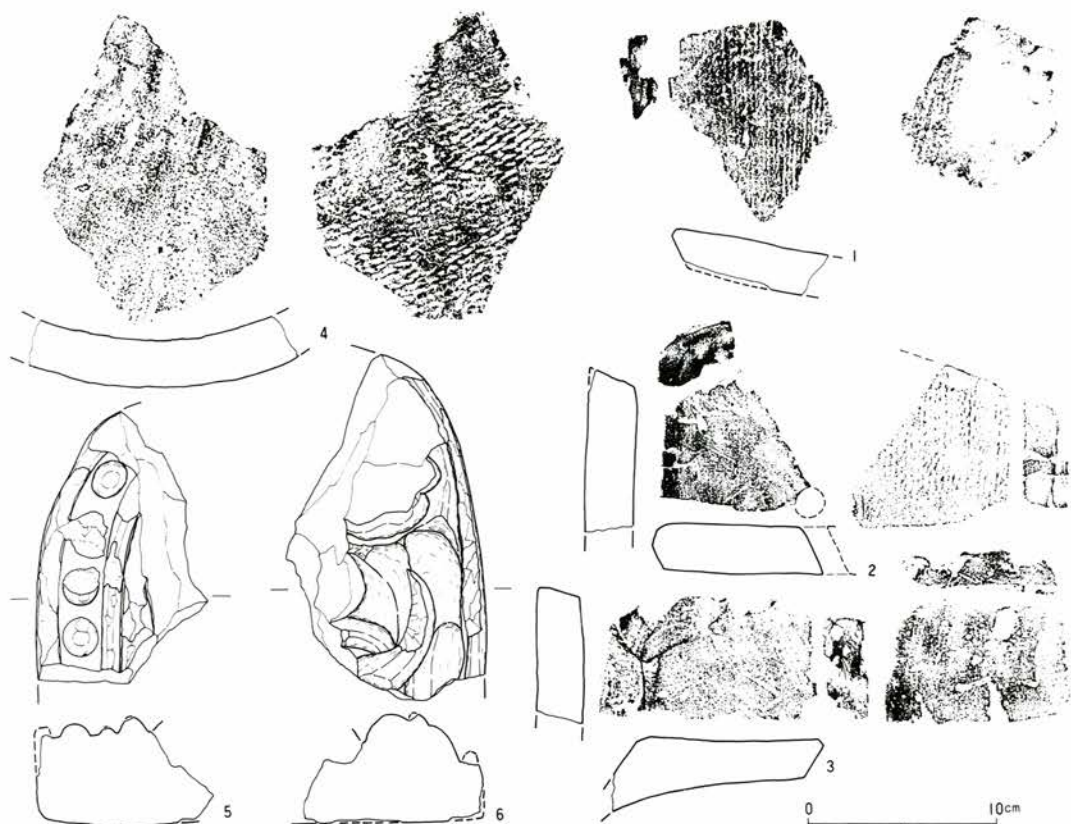


図16 鬼瓦その他

鱗文と推定されるが、9はかならずしも三鱗文と断定できず、「△」印である可能性が考えられる。

10は女瓦の端面「目」印を押捺したものだが、本遺跡の一昨年度の調査では鎧瓦の周縁に「目」印の押捺されたものが認められた。

鬼瓦その他（図16）

鬼瓦、隅切瓦など特殊な瓦をここで一括して扱うことにする。

鬼瓦は北部地区試掘地点eと遺構面上からそれぞれ1点ずつの計2点が出土している。これら2点の鬼瓦は異なった種類のものである。5は左端部分の破片で、幅2.5cmの珠文帯の両端に幅1cmの凸帯がめぐっており、珠文帯には幅2cm、高さ1cmの大きな珠文が配されている。鬼面の表情は不明である。厚さは6cmを測る。胎土はきめの細かい良土で、焼成は軟質で灰褐色ないし灰黒色を呈す。6は右端部分の破片で、幅1cm程度、高さ5mmの凸帯による縁をもち、珠文帯はなく、表面全体に鬼面を描く。本資料では牙および頬と思われる部分がみられる。厚さは5.5cmを測る。胎土は良質で焼成は軟質、灰白色を呈す。

1はA類の女瓦であるが、凹凸両面に縄目の叩きを有する特殊な資料である。これは、瓦の製作時点において、一般の凸型成形台とは異なる凹型成形台の存在していたであろうことを示唆するものと思われる。

2は女瓦A類に属する隅切瓦である。凸面右上隅が斜めに切落とされており、凸面中央と思われる位置には径1.5cmの釘穴を有している。北部地区試掘地点dより出土した。

3は断面が台形の特種な瓦であり、屋根上での使用箇所は不明である。凸面は横位の削りで叩き目痕を消去しており、凹面には布目痕を残す。胎土、焼成は女瓦E類と共通の要素をもつ。

2 中世の遺物

舶載磁器（図17-1～4）

1は青磁蓮弁文碗の胴部片である。淡青緑色の釉が厚くかかる。2は青磁折縁鉢の口縁部片である。釉は暗緑色で透明度が高く、粗い貫入がみられる。3は青白磁無文皿である。口縁部内面が若干肥厚し、端部は尖る。釉は半透明な水色で、内面と外面体部中位までかかる。4は白磁碗の底部片である。高台部を欠失する。釉は灰白色半透明で気孔が多い。4は池中覆土、他は包含層中より出土したものである。

国産陶器（図17-5、6、9、10）

5は瀬戸緑釉皿の口縁部片である。口縁部内外面に淡緑色の灰釉を浸けがけしている。6は瀬戸天目茶碗の体部片である。褐色味のある鉄釉を内外面にかけるが、外面の体部下半は露胎である。素地は灰白色を呈し、黒色の微粒を少量混入する。9、10は常滑甕の口頸部片である。ともに直立する頸部をもち、口縁部縁帯は下方にやや長くのびる。いずれも包含層中より出土しており、年代的には14世紀後半から15世紀前半に相当するものである。

かわらけ（図17-11～15）

11、12は手捏ね成形である。11は口縁部を内彎気味にナデており、体部との境はあまり明瞭ではない。精良な胎土で焼成も堅緻である。12は体部との境に強いナデを廻らせ、口唇部が玉縁状を呈する。胎土はきめ細かく、焼成は若干軟質である。小磨が著しい。13～15は轆轤成形のかわらけで

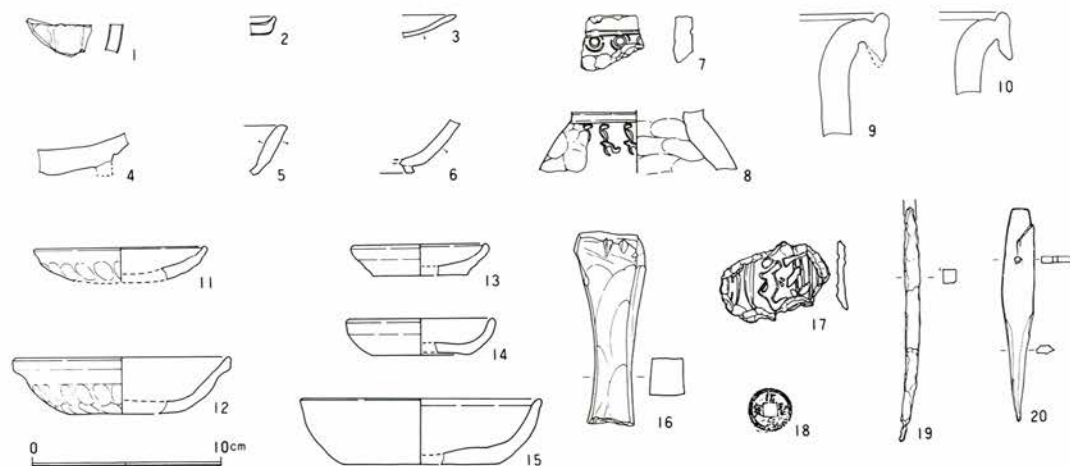


図17 中世の遺物

ある。13は底部から直線的に開き、口縁部は内彎気味に丸められる。14は体部に丸味をもち、口縁部は直立気味である。15は器壁がさほど厚くなく、口縁部は僅かに外反している。中門掘方29内から出土したものであるが、後世の混入品と思われる。かわらけの年代観は、市街地の調査成果から、11、12が13世紀前半代、15が14世紀後半代に位置づけられる。

土製品（図17-7、8）

瓦質に近い軟質の土製品で、胎土に赤褐色微粒および微砂粒を少量含んでいる。小形の袋物と思われるが、同一個体か否かは判断し難い。7は一条の沈線下に二重の竹管文を連続して押捺しており、8は肩部にS字を組み合わせたようなスタンプ文を押捺している。

石製品（図17-16、17）

16は砥石である。火熱を受けて一端は黒く煤け、他の一端は欠失する。使用頻度が高かったためか、中央部分の目減りは著しい。砥面が緩いカーブでねじれていることから、鎌研ぎに用いられたものであろうか。中門掘方28内より出土。17は粘板岩製の板碑断片である。月輪と種字を陰刻するが、種字の意味は判読できなかった。左端にも月輪と思われる円弧弧がみられる。阿弥陀堂址の礎石掘方1内より出土。16、17ともに遺構に伴うものではなく、混入品と思われる。

金属製品（図17-18、19）

18は紹聖元宝（初鑄年 1094）である。包含層中の出土。19は角釘である。頭部を欠失するが、かなり大形のものである。同様の釘は58年度の調査でも出土している。阿弥陀堂址の面上より出土。

木製品（図17-20）

20は中門掘方29内の出土。地山上の木器層中に含まれていたものである。長さ11.7cmを測る。中程から先を削って尖らせている。紐ないし目釘のための一孔を有するが、どのような用途、目的をもった製品であるかは不明である。

3 古代の遺物

土師器（図18-1～3）

1は堂址前面、階段掘方bの壁から抜き取ったもので、黒色粘土層中に含まれた遺物である。胎土中に径0.5mm程の粗い砂粒を多量に含み、焼成は良好、暗赤褐色を呈する。底部は欠失するが、高台状の分厚い底部になると考えられる。古代末期頃のものであろうか。2は甕の底部片である。相模地域によくみられるナデ整形の甕である。3は甕の口縁部片であるが、2の甕とは別の個体と思われる。2、3ともに奈良・平安期に属するものである。

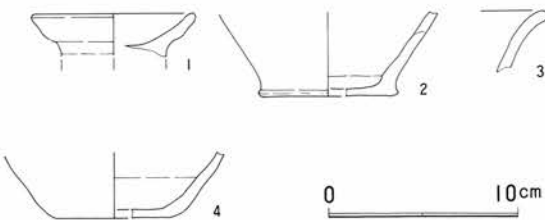


図18 古代の遺物

須恵器（図18-4、図版14-8）

2点出土している。4は酸化炎焼成の坏である。底径6.0cm。底部からの立ち上がり丸味をも

つ。胎土中に微砂粒を含み、焼成はやや軟質である。外底面に回転糸切り痕を残すことから、概ね平安期のものと考えられる。このほかに、甕の底部片が1点出土している。胎土中に白色微粒を多く含む還元炎焼成の甕で、外面の叩き目、内面の同心円文などはナデによって消されている。

4 その他の遺物（図版14-10）

池中より出土した鎌倉石のU字溝である。池中よりの出土のために委細は不明であり、用途も溝ではないかもしれないが、昭和6年に赤星直忠氏が確認している苑池南端の出水口に使われているものと類似していることから取り上げたものである。

第4章 鐙瓦、宇瓦の型式分類

昭和56年度に始まった永福寺跡の環境整備事業に係る発掘調査は、今年度の調査で5年次目に至っている。瓦類については、年度ごとにその概要を報告してきた〔鎌倉市教委1982～1986〕。特に女瓦・男瓦については、昭和59年度および今年度の概要報告で、比較的多くの資料を図示し、その特徴を指摘した。今年度の概要では、5年次にわたる調査のまとめの形で、いままで出土した鐙瓦・宇瓦の各型式を報告することにしたい。なお、昭和56年度以前の資料に関しては、赤星直忠氏の著書に報告されている既出資料があり、発掘調査で出土しなかった型式の鐙瓦・宇瓦が見られるため、併せてここに記載することにした。本寺跡出土瓦は概ね三時期に分けることができる。^(註1)^(註2)

図19・20に使用した型式番号は、鐙瓦にはYA、宇瓦にはYNの頭文字を付し、次に各文様系をアラビア数字で以下のごとくに大別した。

鐙瓦 (YA) I 蓮花文系 II 巴文系 III 寺銘系 IV その他

宇瓦 (YN) I 唐草文系 II 剣頭文系 III 寺銘系 IV その他

アラビア数字につづく番号は、各々の文様系内で新型式と確認した順に若い番号を与えた、それにつづく小文字のアルファベットは、同一型式の異範の表示を意味するものである。本寺跡の発掘調査は、次年度以降も継続的に行われるために新たな型式の増加も予想されるので、次年度以降の概要では、今年度までの概要とその記述内容の重複をでき得る限り避けるために、新しく確認された点についての報告を主体とし、最終的な型式の提示は本報告に委ねることとしたく、ここにお断わりしておきたい。以下、鐙瓦・宇瓦の順で型式ごとに解説する。

1 鐙(軒丸)瓦

YA I 01 a～f 八葉複弁蓮花文鐙瓦。突出した中房に1+8の蓮子を置く。中房外周には短い雄蕊を配しているのが特徴的である。外区内縁に珠文を巡らし、固縁は直立縁で素文である。灰色を呈し焼成堅緻なもの、表面薄墨色で内部灰褐色を呈し焼成がやや軟質なものなどがある。胎土は砂を含むが精良である。現在までに7範種(a～g)を数える。

aは中房の蓮子を間弁に対応させて割り付けている。蓮子と内縁の珠文が大粒である。**b**は範の彫りが比較的深く、輪郭線で表わした花卉中に小さな子葉を配す。中房の蓮子は珠文より大きく、間弁に対応する。**c**は中房の蓮子が花卉の中軸に対応して割り付けている。**d**は花卉全体を浮出して平面をなし、その上に子葉を置く。中房の蓮子は**a**と同様の割り付けによる。**e**は**b**と同様に花卉を輪郭線で表わすが、珠文の割り付けや瓦当径の相違(やや小型)から両者を区別できる。**f**の文様構成は**a**と基本的に等しいが、花卉にゆるやかな起伏があり、また各珠文が小さめで、間隔も広い点で異なっている。**g**の文様構成は**YA I 01 a～f**と基本的に等しい。ただし、瓦当面径14.3

cmと、他の同型式に比べて小型になる。

(註3)

eは鶴岡八幡宮宝物館所蔵品と同範であり、gは鶴岡八幡宮のH A I 01型式鐙瓦と同範である。

Y A II 01 右廻り巴文鐙瓦。巴文の表面は平板状を呈し、頭部の先端を尖らせている。胴部途中から細くなって、尾は半周余りで末端となり短い。瓦当裏面は指頭圧痕を残す。鶴岡八幡宮H A II 01型式の鐙瓦と同範の可能性はある。

Y A II 02 a・b 左廻り巴文鐙瓦。a・bは焼成に軟・硬質の二種があり、胎土・色調ともにY A I 01のそれと近似する。aはbより巴文の尾部が長く、珠文の間隔が広くなる。周縁は直立縁であるが、内側をへう削りした例もある。aの瓦当裏面には人名と思われる「□光」「守□」の押印・へう書きした例が出土している。aは鶴岡八幡宮H A II 09と同文または同範の製品と思われる。

(註4)

Y A II 03 左廻り巴文鐙瓦。巴頭部の先端をやや尖らせ、尾部は細長く延びて尾の先が接合して、界線のようにになっている。珠文は比較的大きく密である。灰色を呈し、焼成はやや堅緻である。胎土精良。

Y A II 04 右廻り巴文鐙瓦。巴頭部の先端はやや丸味をもち、頭部から胴太気味に尾部につづく。尾の末端は離れて界線を設け、そのまわりに珠文を密に巡らす。表面灰黒色、内部灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に小石を多量に含む。瓦当面に黒色砂粒のハナレ砂が付着する。

Y A II 05 左廻り巴文鐙瓦。巴頭部の先端は丸味をもち、胴太気味に尾部へつづき、尾の末端は界線に接していない。外区内縁に珠文を密に配している。表面灰褐～灰黒色、内部灰褐色を呈し、焼成はやや堅緻である。胎土に粗砂を多量に含む。瓦当面にハナレ砂の痕跡が顕著である。巴文の中央に竹管文を押捺した例もある。

Y A II 06 右廻り巴文鐙瓦。巴頭部はやや肥大して丸味をおび、尾は細く長い。外区内縁には連続した剣頭文を配する。表面黒灰色、内部灰白色を呈し、焼成はやや堅緻である。胎土に粗砂を多量に含む。瓦当面にハナレ砂が付着する。同文例は極楽寺、称名寺で出土。

(註5)

Y A II 07 左廻り巴文鐙瓦。巴頭部を連ね、尾の末端はまわりの界線に接する。外区内縁には小さな珠文を密に配している。文様の彫りが浅い。瓦当面に黒色砂粒の付着が多い。表面灰褐色、内部灰白色を呈し、焼成はやや堅緻である。胎土は粗砂を多めに含む。瓦当面にハナレ砂の痕跡が顕著である。

Y A II 08 左廻り巴文鐙瓦。巴は頭部から胴部にかけてほぼ同じ太さであるが、尾は細長く、その末端は隣りの尾と界線に接することはない。珠文は密であるが、間隔が不揃いである。瓦当裏面及び外周は丁寧なナデ調整を施している。表面黒灰色、内部灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土は粗砂を多量に含む。瓦当面にハナレ砂が付着する。

Y A II 09 左廻り巴文鐙瓦。Y A II 08と類似するが、巴文中央に丸い小突起があり、尾の長さは短くなっている。表面薄黒灰色、内部茶灰色を呈し（くすべ焼風）、焼成は軟質である。胎土は粗砂を多量含む。瓦当面にハナレ砂の痕跡を残す。

Y A II 10 左廻り三巴文鐙瓦。瓦当面の下端を残すのみである。文様構成はY A II 08・09と類似

するが、珠文の間隔が広い点で区別される。灰黒色を呈し、焼成はやや軟質、胎土粗。

YAIII01 「永福寺」の寺銘を配した鐙瓦。外区内縁に珠文を密に置く。瓦当面に粗いハナレ砂が付着する。灰褐色を呈し、焼成は堅緻で、胎土は小石を多量に含む。瓦当面径は19cm前後を計り、一般の鐙瓦に比べて大型である。

YAIV01 巴蓮花文鐙瓦。横須賀考古学会所蔵品で、発掘調査ではいまのところ出土していない。圏線で囲んだ中房の位置に三巴文をおく。その周りに七葉の複弁蓮花文を配す。外区内縁には12個（推定）の珠文を巡らし、周縁は直立縁で高い。表面薄黒灰色、内部灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。市内では永福寺跡以外での同範・同文例の出土を聞かない。

2 宇（軒平）瓦

YNIO1a～i 均正唐草文字瓦。中心飾は十字に4花卉を配した端花文である。端花文には各花卉の中央が窪むハート形状の例（a・b・d・f・g）と、各花卉の中央が突出する例（c・e・h）があり、前者の唐草文は花卉から放れて起つものに対し、後者は唐草文と連なっている。左右の唐草文は各2転強または3転させている。表面黒灰色、内部灰～灰褐色、灰白色のいぶし焼風の焼成やや軟質の製品が多いが、なかには灰色を呈した焼成堅緻のものもある。胎土には細砂を含むが精良である。瓦当部の製作法は女瓦凸面の広端部に別粘土を貼って瓦当部を作り、頸部下端及び頸部は横ナデで整形している。凸面は縦位の縄叩き目を残し、凹凸面にハナレ砂が付着する。今年度までにa～iの9範種を確認している。同範・同文例は、鶴岡八幡宮、勝長寿院から出土している。

YNIO2 小破片2点しか出土していない。内区には釣針形の唐草文を上下交互に配したと思われる、唐草の巻き込んだ方に石鏃状のものを置いている。内外区は界線によって分け、上下外区・脇区には小さな珠文がめぐる。灰褐色を呈し、焼成はやや堅緻である。胎土に小石粒を多く含む。

YNII01 陰刻の剣頭文字瓦。陰刻の下向き剣頭文を連続して配したもので、剣頭中の鎬は断面三角形を呈し、太く先端が尖っている。灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土は細砂を含むが精良である。同文例は、鶴岡八幡宮の発掘調査で中世最下層の遺構面上に伴って出土している。

YNII02 陽刻の剣頭文字瓦。横須賀考古学会保管品で、発掘調査では出土していない。太い明瞭な凸線で下向き剣頭文をそれぞれ独立して配し、剣頭中に長く先端の尖った鎬を入れる。灰褐色を呈し、焼成は比較的良好である。胎土は小石粒、砂を多量に含む粗土。凹面は布目圧痕を残す。頸部下端と頸部は横ナデで整形する。

YNII03 剣頭文字瓦。太い凸線で下向き剣頭文を連続して配している。灰褐色を呈し、焼成はやや硬質であるが、二次焼成を受けて軟質になったものもある。胎土に小石粒を若干含む。瓦当面と凹面は細かな布目圧痕を残し、瓦当部に接合された女瓦は厚手である。

YNII04 剣頭文字瓦。文様構成は基本的にYNII03に等しいが、剣頭文の傾きにより区別した。表面黒灰色、内部灰白色を呈し、焼成やや軟質のものと、灰褐色を呈し焼成やや堅緻のものがある。

る。胎土に小石粒を若干含む。頸部下端は横ケズリ、頸部から凸面にかけて縦ケズリの上を横ナデで整成する。厚手の女瓦を用いている。

Y N II 05 浮き彫りの上向き剣頭文を独立して配する剣頭文字瓦である。細い凸線で描かれた、「永」の文字がみられる。界線は上下に周縁部と接するように配している。胎土は小石粒を多量に含む。本型式は小片1点のみの出土であり、二次焼成を受けている。

Y N II 06 瓦当中央に三巴文を置き、凸線による上向き剣頭文を連続して配した剣頭文字瓦である。界線は四方にみられるが、下方の界線は剣頭文下端と接している。灰褐色を呈し、焼成やや硬質のものと、表面黒灰色、内部灰白～灰褐色を呈し焼成やや軟質のものとがある。胎土は小石粒を含む。瓦当部の作りは女瓦凸面の広端縁を斜めに切り落とし、別粘土を貼り付けている。瓦当面及び凹凸面に黒色砂粒のハナレ砂が付着した、凸面には三鱗文と花菱文などを組合わせた叩き目を施すが、外くは横ナデで磨り消している。

Y N II 07 **Y N II 06**と同様で、瓦当中央に三巴文を置き、凸線の上向き剣頭を連続して配すが、**Y N II 06**よりもひとまわり小さい。表面灰～黒灰色を呈し、焼成はやや堅緻である。胎土に小石粒を含む。瓦当面及び凹凸面に黒色砂粒のハナレ砂が付着し、凸面には花菱文の叩き目を残す。瓦当上端は面取り風の横ケズリを施す。**Y N II 06・07**に類似した例が極楽寺から出土している。

Y N II 08 細い凸線の上向き剣頭文を連続して配し、界線は上下の周縁に接するようになる。表面黒灰色、内部灰白色を呈し、焼成はやや堅緻である。胎土に小石を含む。瓦当上端を面取り風に横ケズリを施し、瓦当面及び凹凸面には黒色砂粒のハナレ砂が多量に付着する。頸部下端及び頸部は横ナデで整形している。女瓦部の厚さは2 cmを割る薄手のものである。

Y N II 10 細い凸線の上向き剣頭文を連続して配すが、界線は上方のみにみられる。界線を除けば**Y N II 9**と似た剣頭文字瓦である。表面黒灰色、内部灰白色を呈し、焼成はやや堅緻である。胎土は小石粒が混る。瓦当面に黒色砂粒のハナレ砂が付着する。

Y N II 11 細い凸線による上向き剣頭文を連続して配す。上下方に界線がみられない点を除けば**Y N II 08**と似た剣頭文字瓦である。表面黒灰色、内部灰白色を呈し、焼成はやや軟質で、胎土に小石粒を含む。瓦当上端を横ケズリで面取りを施し、頸部下端及び頸部は横ナデで整形している。

Y N II 2 凸線によるやや横長の上向き剣頭文である。上下方に界線がみられるが、それ以外は**Y N II 10**と似た剣頭文である。表面黒灰色、内部灰白色を呈し、焼成はやや堅緻である。胎土に小石粒を若干含む。頸部下面及び頸部は横ナデによる整形を施している。

Y N III 01 a・b 「永福寺」の文字を配した寺銘字瓦で、書体の異なるa・bの2種が確認されている。灰褐色を呈し、焼成は堅緻のものがほとんどである。胎土に小石粒を多く含む。**Y N III 01**は**Y A III 01**の寺銘鑑瓦との組合せが考えられ、他の字瓦に比べて大型である。範の打ち込みが深く、瓦当面には黒色砂粒のハナレ砂が多量に付着している。瓦当上端は横ケズリの面取りを施し、頸部は横ナデで整形する。

Y A III 01と**Y N III 01**の軒先瓦は、昭和40年代の初めに、三堂推定地の北西に位置する西ヶ谷（僧

坊推定地)での発掘調査において比較的多量に出土したとのことである。^(註6)

Y N III 02 Y N III 01とは逆方向で小さな「永福寺」の文字を配する寺銘字瓦である。四方に界線をもち、上下外区及び脇区に珠文を密にめぐらせる。文様の彫りは浅い。今年度までの発掘調査では小片1点が出土したのみである。

Y N IV 01 連珠文字瓦は小片1点のみである。内区には珠文を横位に連ね、上下区を界線によって分ける。凹面には細かな布目痕を残す。瓦当部は女瓦凸面広端に粘土を貼った接合式で、顎部下端は横ナデ、顎部から女瓦部にかけて縦ナデのヘラ調整を施す。連珠文字瓦は鎌倉では極めて稀な資料である。

註1 赤星直忠「永福寺址の研究」『中世考古学の研究』有隣堂1980年、第4・5図に鎧瓦・字瓦が報告されている。

註2 拙稿「鎌倉における瓦の様式—鎌倉時代の瓦当文様を中心に—」『仏教芸術—鎌倉の発掘—』164号、毎日新聞社1986年 において本寺跡出土瓦を市内他遺跡の出土瓦との対比や調査結果から考えて概ね三時期に想定した。

註3 鶴岡八幡宮境内発掘調査団「鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書—鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査—」鎌倉市教育委員会1985年、Fig24-1

註4 註3文献、Fig24-10

註5 木村美代治「瓦」『極楽寺旧境内遺跡』鎌倉市教育委員会1980年、図23-14及び横浜市教育委員会「称名寺庭園苑池保存整備報告書—昭和58年度—」1984年、第4図-24に同系例が報告されている。

註6 大三輪龍彦氏の御教示による。